

劇団虚仮華紙プロデュース

0.  
03

# 『オス』

作 田中晶

## 登場人物

男S Ⅱ 俺

男A Ⅱ 高校の俺

女A Ⅱ 高校の同級生

男B Ⅱ 大学1年の俺

女B Ⅱ 大学で知り合った女の子

男C Ⅱ 大学4年の俺

女C Ⅱ サブカル好きの子

男D Ⅱ 社会人の俺

女D Ⅱ 職場の先輩

「高校生」「大学生前半」「大学生後半」「社会人」の4つの物語で構成される。

それぞれの物語にはメインとなる人物がいて、その他の人物は同時に何役かこなす。

それぞれの物語は「走馬灯」によって繋がっている。メインパートではアルファベットは省略している。

舞台は四角く台上げされている。その上には、人の住居スペースのよ3うな空間。男性の一人暮らしにあるような生活雑貨が無造作に散らばっている。客席の背後はピンク色のヒダで覆われている。舞台奥にもこのヒダは存在しており、舞台奥の様子は客席からは見えない。開場中、舞台上で男Sが布団にこもりながらノートパソコンをいじったり、マンガを読んだりしている。

場内のBGMは「あの素晴らしい愛をもう一度」のカバー曲。

彼は時折咳き込み、具合の悪そうな様子。実際に彼は風邪をひいているのだ。

開演時間になると彼はPCの電源を落とし、眠る。彼が寝入ったと同時にCUE曲、暗転。開幕。

## 1

### 走馬灯

明転すると男S以外の登場人物が舞台にいる。A以外の男女一組で幾何学的なポーズ。男が女に騎乗しているようなポーズで女性が辛い体勢。Aの二人は腰かけて夕陽を眺めているかのようなポーズ。

男B はじめに断っておく。俺は正気だ。これは必要に応じてなのだ。だからどうか蔑んだ目を向けないでほしい！徒競走で言えばこれは、よい、どんの、よいなのだ！

男D そう、よい！（全員スタートしそうになる）なのだ！

男C 本人がどう思ってるかは知らないが、俺は今、猛烈に飢えている。

男B 思い出を垂れ流す前にまずは一言申さなければならぬ！

男全 俺は喉が渴いているのだ。

女が震えだす。

女C 重いよー。

男C 黙れ種馬！辛いのは俺なんだ。

男B （女Cを叩いて）この、辛いのは俺なんだ！俺なんだぞ！

女B えーん。

男D さて、お立会いの皆様方はなぜここに呼ばれたのかをご存じであろう

男 C 唐突だが、俺は今死の運命にとらわれている。

男 B ありていにいえば、今生きるか死ぬかの瀬戸際にいるということ。

男 D 男一匹、人生はいつ死んでもいいように堂々とふるまわなければなら  
ない。

男 C しかしながらまだ24の齡、やり残したことが多すぎる。

男 B せめてもの慰めに、俺の生きざまを皆様方に周知していただきたい。

男 C これは俺の自慰行為である！

男 B 学術的に言えばマスターベーション！

男 D 卑俗的に言えば公開オナニー！

女 D 公然わいせつ罪だ。

男 D (女Dを叩きつつ) 馬鹿野郎！ん？馬鹿とはなんだ！馬に失礼だろ  
う！(また叩く)

男 C 皆さんは今自分のいる空間がお分かりであろうか？狭いヒダの中を  
もぐつてきたこの空間を！

男 B ここは小宇宙である！寄る辺なき内省的空間であると同時に人間が  
コスモを知覚する空間！

男 D 俺は今コスモの内側にいる。諸君にはぜひビッグバンの瞬間を観測し  
ていただきたい！

無個性な携帯電話の着信音。熱弁していた男たちの動きが止まる。

男 B 能書きが過ぎた。俺は飢えている。

男 C 俺は飢えている。

男 D 俺は飢えている。

男全 渴きを癒せるのはピンク・モラトリアムだけ！

男 B (女Bを叩きつつ) 走れ！走るんだ！

男 C (女Cを叩きつつ) 走らば愛してやらないぞ！

男 D (女Dを叩きつつ) 俺を最後の幻想に浸らせろ！

A以外の男、女は必死に走る。走馬灯がぐるぐると回り始める。Aの  
二人も回り始める。二人は高校の制服である。

馬とその騎手たちが好き勝手なことを騒いでいる。高校の教室のよう

な騒がしさ。  
次第に話題は恋愛の噂話になっていく。どうやら男Aと女Aの話のようである。

二人は次第に回りに囲まれていって、最後には舞台中央に押し出される。

周りは囁し立てる。ムキになって反論する二人。

すると調子に乗った学生たちがAの二人を押し出す。ぶつかるふたり。

女

あ。  
ごめん、大丈夫？

男

手をつないだ瞬間、ズイン。はじめてお互いを意識したとき、恋敵との対決までがパントマイムでフラッシュバック。騒ぎの渦に飲み込まれる二人。そのまま二人は舞台空間からはける。騒ぎも収まってくる。パソコンを叩く音が刹那聞こえる。

## 2

### 大学一年の俺

騒ぎが収まると舞台上には誰もいない。ここは大学一年の俺のアパートである。

扉の開く音。男Bと女Bが入ってくる。女Bは軽く酔っている。季節は大学の夏休みが終わったころ。男は田舎から上京したばかりでまだ垢抜けなさがある。

女 お邪魔しまーす！

男 ちよちよ、隣の人に迷惑だから、ね？

女 ー、ごめんなさい！

男 ほら、上着。

女 ー！（手を伸ばす）

男 なに？

女 脱がせて。

男

はいはい。

一枚脱ぐと薄着である。気を使っているフリをしてしつかり眺めている男。上着をハンガーにかける。

女 ーん。(布団に倒れる)

男 なんか飲むよね。コーヒーでいい？

女 や。

男 じゃあお茶。

女 やー。飲み足りないー。

男 さっきいっぱい飲んでたじゃん。

女 足りないのー。

男 えー。

女 なんかないの？

男 ーん？

女 お酒。

男 あー、ごめん。ないわ。

女 えー、だったら途中で買ってくればよかったじゃん。

男 ごめん。

女 手際が悪いねえ、君は。まったく田舎もんだなあ。(頭をなでる)

男 いやあ。(にやける)

女 ーんふー。ねえねえ。

男 なに？

女 買ってきて。

男 ーん？

女 お酒。二次会だよー。今日はここで二次会！

男 あー、うん。二次会、二次会ね。

女 なによ。……新庄君。

男 なに？

女 あーんて。

男 あーん？

女 そ。あーん。

男 ……あーん。

女は男の口元に顔を近づける。緊張する男。

女 やっぱり。全然飲んでないじゃん。  
男 え、結構飲んだよ。  
女 うそ。全然お酒の匂いしないもん。  
男 えーするって。沙織ちゃん酔ってるからじゃん？  
女 酔ってないですー。全然ですー。  
男 絶対酔ってるって。  
女 うーるさいなあもう。ほら、はやく買ってきてよ。  
男 うえーい。  
女 私ここでまってるからね。(意味ありげ)  
男 ……うん。

男は家を出る。

男 いよっしゃ！

ガッツポーズ。ズイン。男、コンビニに向かう。コンビニでお酒を物色すると同時に、コンドームを買おうかどうか思案する。色々迷って、結局購入。  
そのころ、女は男の自室で家捜し、なにかを見つけたようである。また身づくろいをする。  
帰ってくる男。女は寝たフリをする。

ただいまー。

……。 (寝たふり)

……。ただいまー？

……。

……。沙織ちゃん？

……。

寝た？……えー、まじ？

……。

男 (明らかに落胆する) ないわー。

しばらく女を見つめる男。悩む。頭をなでる。無反応。頬をなでる。8  
つつく。次第にエスカレートしていく。やがて手は危ういところへ。

女 ……うーん。

男 ! (手を引っ込める)

女 (起きる、フリ) ……遅いから寝ちゃった。

男 ごめ。

女 買ってきた?

男 うん。

女 は買ってきたものを漁ろうとする。慌てる男。

男 ちよ、まってまって。いま用意するから。

女 なに買ってきたのー。

男 ちゃんと買ってきたって。ほら。(缶チューハイやら缶ビールをとり

出す)

女 いい子いい子。(頭をなでる。癖のようだ)

二人は缶を開ける。コンドームはばれてない様子。

女 じゃ、かんぱーい。

男 かんぱーい。

乾杯。その後映画の話が始める。どうやら二人は映画サークルのよう  
だ。客席の後ろの脳壁が赤く染まって、湿気を帯びはじめる。興奮  
しているようだ。それは実際に男の様子にも現れ始める。妖精一同、  
ピンクモラトリウムに期待する。

女 新庄君?

男 ん?

女 ちゃんと聞いている?

男 なによ。きいてるって。

女 嘘だ。絶対聞いてなかった。



男 本当だって。

女 ねえ。

男 ん？

女 新庄君がなに考えてたか、当ててみよっか。

男 は？

女 見てたでしょ。

男 ……え？なにを？

女 見てたでしょ。ねえ。

男 見てないよ。

女 何を？

男 ……。

女 ……(にやにや)

男 ……。

女 男の子だからしょうがないもんね？(部屋に隠されていたエロ本を取り出す)

男 うわ……！！(本没収)

女、爆笑。男、苦笑い。

男 ……だってさー、しょうがないじゃん。そんな足だしてさ。見るつしよ、普通。

女 エッチ。

男 ……すいません。

女 いいよ、みても。

男 え。

女 女だってさ、見て欲しいから着てるんだよ。勝負服。

男 今日、勝負服なんだ。え、勝負？勝負する気だったの今日？え、相手誰？

女 ……秘密。

男 うわー、結構ショックだよ。

女 なんで？

男 いや、深い意味はないんだけど、なんか、ショック。  
女 んー、なんでよー？

男 だから意味はないって。  
女 ……ふふー。

抱き着き。いい子いい子。

女 君はかわいいねー。(離れてから) だから優子ちゃんも君のこと好き  
なんだよきつと。

男 え？

女 ん？

男 どゆこと？

女 あれ、知らないの？

男 なにが。

女 優子ちゃん新庄君のこと好きじゃん。

男 えー。

女 めっちゃわかりやすいよ。てか今日だつてずっと一緒に話してたし。

女 付き合ってるんじゃないの？

男 あれは映画の好みが合うからなんか。いや、ホントそういうのじゃな  
いよ。てか興味ないし

女 まじ？

男 マジ。

女 へー。優子ちゃんかわいそー。

男 なんでよ。

女 だって優子ちゃん絶対新庄君のこと好きなのに。報われないなー。

男 いやー、でも無理だから。これはしょうがない。

女 ……なに？好きな人いるの？

男の携帯電話が鳴る。メール着信。

男 あ、ちよつとごめんね。

女 ……。

『新庄君家ついた？今日は楽しかったよ。また飲みに行こうねー(顔  
文字)』

男、メールを確認して返信。

『ついたよー(顔文字)じゃあき、話してた(映画名)観にいかない？  
勧めてくれてたけどあれ男一人じゃ行きにくくて(顔文字)』

男  
ごめ。

女  
誰から？

男  
クラスの友達。明日のレポート聞かれた。

女  
新庄君はもうやったの？

男  
俺夏休みの宿題初日に終わらせるタイプなんだよね。

女  
んー、真面目だなー！新庄君は何でそんな真面目なのかなー？そんな  
あか抜けないところ大好きだよー？

女、男をぐりぐり。

男  
痛いって。

女  
んふふー。

男  
沙織ちゃんってき。

女  
ん？

男  
頭撫でるの好きだよね。撫でられるの好きって子は多いけど。なんか  
珍しい。

女  
あー。そうかも。ていうか、好きっていうよりも、癖？

男  
なにその癖。

女  
男の子の頭撫でるとき、なんか、顔がにやけるよね。

男  
にやけてた？

女  
めっちゃ。

男  
めっちゃか。

女  
うん、めっちゃ。

男  
うわ、恥ずかし。

女  
にやけるってことは嬉しいってことじゃん。じゃあ、しょうがないか  
らなでてあげるよーって。いっちゃえば、優越感。

男  
そんな癖になるほど撫でてんの。

女  
まーぼちぼち。

男  
まーそっか。沙織ちゃんモテるしね。

女 えーそんなことないし。  
男 いやあるって。みんないつてるよ。

女 本当？

男 マジマジ。あれだよね、沙織ちゃん彼氏とか尻にひいてそう。

女 ねえ。

男 ん？

女 私彼氏いないよ。

男 あ、そうなんだ。

女 なんかねー、付き合ったことはあるんだけどすぐ別れちゃうんだよね。

男 うん。

女 なんだろう、私魅力ないのかな。

男 なにいつてるの。

女 だって全部振られてるんだよ。向こうから告ってきたのに。これって

男 おかしいじゃん。

女 偶然でしょ。

男 偶然じゃないよ。

すこし沈黙。

男 まあさ、飲もうよ。ね、どうせならさ、楽しく飲んだ方がいいってや  
っば。

冷蔵庫に酒を取りにいかうとする。女が服を掴む。

男 ん、なに？

女 私ね、気にいった男の子しか撫でないんだよ。

男 ……そうなんだ。

女 ……。

男 いや、なんかそう言ってもらえると、嬉しいわやっば。

女 ……。

男 ……。

女 ねえ。

男 ん、うん？

女 もう終電ないよね。  
男 あー、そうね。うん、ない。  
女 ……。  
男 ……。  
女 ……。

長めの沈黙。女は男からしゃべるのを持っているようだ。男もそれはわかっているのだが、何を言えいいやらわからない状態。

男 お、おなかへってない？  
女 減ってない。  
男 ですよね。  
女 ……。  
男 ……。  
女 ……。  
男 ……。  
女 うん。  
男 シャワー?!  
女 え?  
男 終電ないし、今日泊まるよね。だからシャワーとか浴びちゃう、みた  
女 いな。あ、タクシーとか使っちゃおう?  
男 ううん、じゃあ、シャワー借りる。  
女 あ、そう。あー、タオルこれ。あ！（浴室に駆け込んで洗濯物を取り  
男 込む）はい、どうぞ。  
女 ありがとう。……覗かないでね。  
男 （神妙に）はい。

女、浴室へ。  
男、テンションマックス。いろいろ準備を始める。コンドームは枕元へ。

脳内はピンク一色。押さえきれない男は体操を始める。  
ふと我に返る男。己の股間を眺める。ちよつと持ち上げてみる。満足  
そうな表情。

ケータイに着信。メール。

『いこー（顔文字）今度の日曜日あいてる?』  
返信しようとする男。

シャワーの止まる音。走る緊張。ドアが開く。女、服を着ている。

14

……。

シャワー、ありがと。

ああ、うん。大丈夫。大丈夫。

風呂上りの一杯！（チューハイ一気飲み）

まだ飲むんだ。

シャワー浴びたらさめちゃったもん。

そう。

新庄君も、浴びてきなよ。

！

男 うん、いつてくる。……覗くなよ。  
女 ばーか。

男、浴室へ。女、男のケータイを開く。優子からのメールを確認。

少し沈黙。その後、鏡を取り出して身だしなみを整える。浴室を見た

後、電気を消す。暗転。

シャワーの止まる音がする。ドアが開く音。

男 出ました。……あれ？……。沙織ちゃん起きてる？

女 うん。

男 もしかして寝ちやう？

女 新庄君って童貞？

男 は？！ちげーし。

女 ほんと？

男 高校のときの彼女。

女 そう。じゃあわかるよね。

男 ……。

女 ねえ。

男 はい。

女 本当に優子ちゃんと何もないんだよね。

男 ないです。なんもない。  
女 本当に？  
男 何度も聞くなよ。

明かりが漏れる。どうやら女が男のケータイを開いた様子。その漏れ  
でた光から女が服を脱いで布団に入ってる様子が伺える。

女 はい。(ケータイを渡す)

男、ケータイを受け取る。

女 なんて返信するの。  
男 ……。

沈黙。

女 勝負服、無駄になっちゃうかな。

男、ケータイを閉じる。つまり暗転。ごそごそと音が聞こえる。  
再び携帯電話の無機質な着信音。その音は次第に大きくなる。

### 3 走馬灯

男C うるさい！！！！

男C 明転。場面は脳内に戻っている。女たちは雨漏りを防ぐバケツのよう  
なポーズ。

男D うるさいぞーうるさいぞー！！

男B 騒音！騒音！

男C なんだ！やっとピンクモラトリウムが落ちてきそうだというのに！

男D 嫌がらせかこれは？

男 B 宣戦布告か？  
女 B ねえねえ、今のってジャンプ？  
女 C マガジンでもありそうだね。  
女 D いやサンデーでしょ。(部屋を物色して)全部あるねえ。  
男 C ええい、いつまでバケツをやっているんだ！(女 C を蹴る)  
女 C そんなー。  
男 B 騎馬隊、編成よーい！  
男 D 騎馬隊、編成よーい！

一瞬の沈黙。

男 B この間抜け！(女 B を蹴る)  
女 B いたー！  
男 D 騎馬隊と言っているだろう！早く馬になれ！(女 D を蹴る)  
女 D きゃー！

騎馬隊のポーズ。もちろん騎手は男たちである。

男 C バランス悪いな。  
女 C ごめんね。  
男 B 俺の渴きはいつ癒されるのか。  
男 D 我がリビドーよ、怖気つくのもここまでだ。  
男 C いざ、出陣！

男たちはまた走り始める。渦が回り、男 A と女 A の甘酸っぱいパント  
マイム。彼女は頭をなでられるのが好き。彼は頭をなでるのが好き。  
最終的に告白成功まで行き着く。暗転。  
またもキーボードを叩く音。

#### 4 大学4年の俺

目覚ましの音。もぞもぞと動く音。目覚まし止まる。明るくなる。朝



チュン。

目覚ましを止めたのは女。横に男が寝ている。一晩明かした後のよう。

ちよつと達也、おきて。……達也。

(爆睡)

達也!……。(ニヤリ)

女、布団から出る。寝巻き。台所からフライパンとお玉。がんがんやる。

朝だー!

馬鹿、うっせんだよ!(怒鳴り)

あ、ごめん……。

ありえねーだろお前。追い出されるだろ俺が。

一回やってみたくて。

まじありえねーし。(また寝る)

……。(またがんがんやる)

男、起きて取り上げる。布団に入れてまた寝る。

おきてよー。

……。

ねえ。

頭痛い。

遅くまでやってるから。

寝る。

遊びに行くっていったじゃん。

一人で行けよ。

なにいつてんの。

俺は寝る。

達也楽しみにしてたじゃん。

……。

無視すんなよ。

男 ……  
女 ねえ、久々なんだからさあ。  
男 知らねーし。  
女 すねないでよ。  
男 意味わかんね。  
女 もう。……ごめんね。  
男 別に謝ることなんてないだろ。  
女 ……そうだね。さ、起きよ。  
男 ……。

男、もぞもぞとする。

男 朝飯。  
女 何がいい？  
男 ご飯、目玉焼き、味噌汁。  
女 いつも通りだね。  
男 日本人ならこれでしょ。  
女 卵あるの？  
男 俺が切らすわけないだろ。  
女 はいはい。

女、エプロンをつけキッチンへ。落ちている缶のごみを蹴る。

女 ちょっと、なにこれ。  
男 あ？  
女 酒ばっかじゃん。  
男 ああ。  
女 うわー。何本はいつてるの。  
男 知らない。  
女 ちょっと、酒そんな飲まないじゃん。  
男 なんか、飲まないと寝られなくて。  
女 (戻ってきて) それやばくない？  
男 さあ。

女 そう。(戻る) 順調なの？  
男 煮詰まってる。

女 撮影は？

男 ストップ中。脚本直ししてる。

女 そんなんで間に合うの？

男 なんとかする。

女 そうだね。

男 手伝ってよ。

女 ……。

男 優子を手伝ってくれたらすぐ終わる。

女 頑張るっていつてたじゃん。

男 優子ー。

女 無理だって。

男 知ってる。

女 じゃあいうな。

男 ……はーい。

しばらく調理の音。

男 そつちはどうなの？

女 ー、覚えること多くて大変だよ。

男 てかまだ学生なのにさ、なんでそんな頑張ってるの。

女 研修うけないといけないの。

男 もういいじゃんそんなの。

女 わがまま言わない。

男 ー。

女 甘えん坊だね君は。

男 知ってんじゃない。

女 知ってる。

また調理音。

男 いつ引っ越すの？

女 再来週。……遠くなっちゃうね。  
男 まあ都内だし。会おうと思えばすぐあえるでしょ。  
女 そうだけどさ。

調理音。

女 私のこと好き？  
男 なに改まって。  
女 なんとなく。  
男 意味わかんねーし。  
女 いいじゃん、別に。  
男 カメラやってる時の君は好き。  
女 まあたそんなこといって。

女、チンした冷凍ご飯と目玉焼き、インスタントみそ汁を載せて登場。

女 片付けて。

男、布団を畳んでテーブルをだす。

男 おお。うまそ。  
女 ただの目玉焼きじゃん。  
男 いやなんかこの半熟加減が、わかってるなあって。  
女 もう長いですから。……頂きます。  
男 頂きます。

食事。男は目玉焼きをご飯に載せて、黄身に穴をあけ、醤油をたらし、ぐちゃぐちゃする。

女 汚い。

男 これが一番うまいんだって。

女 いつもそういうね。

男 うまいもんはうまい。てか俺から言えばお前の方がありえない。

女 美味しいじゃん、マヨネーズ。  
男 卵にたまごかけるとか意味分かんねーし。どっかおかしいんじゃないの？

女 それいったら君だつてなによその食べ方、どうせ最後にぐちゃぐちゃにするんなら卵かけごはんでもいいじゃん。

男 ばっか全然違うでしょ。まず食感が違うし。

女 あ、今バカっていった。バカっていった。

男 は？

女 うわーありえない。謝つてよ。

男 なにいつてんだよ。

女 バカとかマジでないんだけど。あり得ない。

男 だってバカじゃんお前。

女 なにそれ？女にバカっていう普通？

男 あーもううるせーな。

女 うるさくないし！

男 怒鳴つてんじゃんお前。

女 怒鳴つてない！謝つて！

男 はいはいすいませんでしたー！

女 誠意がないー！

男 あーうるせえな！

隣から壁ドン。黙る二人。

男 食うか。

女 うん。

黙々と食事を始める。

女 喧嘩とか、いつ以来？

男 さあ。

女 さあつて。

男 もう長いから。

女 まあそうだね。

男　なんか、撮影してるときのノリ思い出した。  
女　そう？

男　うん。毎日こんな感じだったよ。  
女　そうだったんだ。

男　なんだそれ。

女　あんまり覚えてないんだよね。

男　なんで。

女　だって私の目当ては達也だったもん。ずっと達也見てたから他は覚え

てない。

男　……

女　のろけちゃった。ふふ。

どこからかキーボードを叩く音が聞こえる。その間は男女ストップ。  
箸をおく男。

男　あのさ。

女　ん？

男　聞きたいんだけど。

女　何？

男　お前本当に就職するんだな。

女　そうだよ。

男　なんで？

女　なんでって。

男　せつかく才能あるのに。

女　ないよ。

男　あるって。

女　ないない。

男　もったいないんだよ。

女　……。

男　聞けよ。

女　聞けるよ。食べてるから、話しなよ。

……あのさ、本当に優子には感謝してるんだ。沙織が流した噂のせい  
でサークルやめた時も、一緒についてきてくれた。あれ信じなかった

の、お前だけだもんな。

……。

俺がここまで映画撮ってこれたのも、お前のおかげなんだ。なあ、一緒にやっていこうぜ。そうすればさ、またいいもの作れるって。賞取れたのお前の力だつてみんないってるのはさ、もう俺もいい加減認めよ。お前がいたから賞取れたんだ。うん。今なら素直に思えるんだよ。ほんと。だからさ、頼む。就職やめて、俺と一緒に映画撮ろう。んでまたいっぱい喧嘩して、ずっと一緒にいて。俺がへますんのを優子がフォローして、

ごちそうさま。

……。

食べないの。

……。

……。

軽い沈黙。

そろそろさ、諦めてよ。

は？

同じ話するのもう飽きた。

……。

一緒に話して決めたよね。

そうだけどさ。

ねえ、達也は私のこと好き？

好きだよ。

私も達也が好きだよ。達也とこれからも一緒にいたいって思ってる。だから就活したし、ちゃんとうまくいってる。もうさ、子供じゃないんだから。自分の才能くらいわかるよ。もちろん私だって映画好きだよ。でも観るのと作るのは違うんだって思い知った。だから私にとって映画は趣味でいいの。本気になれるものはもうあるから。達也がいるから。だから私がんばれたの。

……。

これで最後にするって決めたよね。

男 女

女 男 女 男 女

女 男 女 男 女 男 女 男 女

女 男

男 ……  
女 ねえ。  
男 俺は、続ける。  
女 そう。  
男 でも全然うまくいかないんだよ。優子がいないと、何もできない。  
女 もういいって。

女にしがみつくと男。

女 君は本当に甘えん坊だね。  
男 うっせ。  
女 それに自信喪失？  
男 うっせ。  
女 あつちも元気ないもんね。  
男 うっせ！  
女 ふふ。

沈黙。女は頭をなでようとする。それを払う男。

男 撫でるの嫌だっけってんじやん。  
女 そうだね。……なんか私たち、映画みたいだよ。  
男 は？  
女 ほら、あそこらへんからの構図でさ。  
男 ほんとだ。  
女 青春の喪失を描いた恋愛ドラマ！みたいな。  
男 はは。  
女 学生が作った都合のいいドラマだね、こりゃ。狙いすぎだもん。こう。  
男 いいじゃん、学生だからそういうの作れるんだし。  
女 学生の時にしか作れないモラトリアム映画。  
男 そう。  
女 くだらない。  
男 え？  
女 君は、まだ撮りつづけるんだね。



男 うん……。

女 ね、あそびにいい？

男 ……。

女 せっかくのやすみなんだからさ。

男 ……。(ぎゅっとする)

女 それともこのまま？

男 ……。

ケータイがなり始める。ノイズ。

女 私はそれでもいいよ。

男、女を押し倒す。まぐわおうというところで例の携帯電話が大音量。

## 5 走馬灯

男 B なぜいつもこうなのだ！

男 C ここからが本番だろう！

男 D そうだそうだ！鬱展開を我慢してやっとまぐわおうというときに！

女 B ねえ、今のは何かな。

女 C 90年代の青年マンガのような。

女 D ヤンジャンよりもヤンサンのような。

女 B どんな違い？

女 C りぼんとちやおよりもちがうの？

女 D そもそもヤンサンは廃刊したけど。

女 B どうかこの逆転は無理がないかい？

女 C 映画に未練たらたらだったのかな？それともこっちのほうがカッコいいって思ったのかな。

女 D 本当は簡単に切り捨てたくせにね。だから優子ちゃんに切り捨てられちゃったんだよ。

女全 ねー。

男 B ええい！事実などどうでもいい！

男C 俺に今必要なのはピンクモラトリアム！

男D ピンクモラトリアムさえ落ちてくればあとはどうでもいいのだ！ほ  
うっておいてくれないか！

女 (口々に着信音の真似)

男B うるさいだまらっしゃい！

男C もつと気合をいれる！後がないぞ！

男D 俺が死ぬ前に、あのすばらしいリビドーをもう一度！

女B たかが風邪じゃ死なないよ。

男B 死ぬかもしれないじゃないか。

女C 死なないよ。馬は走ってないもの。走っているのは君の思考だけ。

男C うるさい、お前は馬だ！馬らしく嘶け！

女D 無理だよ。だって馬じゃないもの私。ただの電気信号なの。君は電気  
信号なの。

男D ええいだまれだまれ！馬が嫌ならお前は車だ！

男B そもそもこの時代に馬とは何だ！これからは走馬灯ではなく、走車灯  
となれ！

男C 社会の歯車よろしく、回り続けるのだ！

男D 自足100キロで走り続けるのだ！風の速さで俺の渴きを癒してく  
れ！

車となって回る女。それに載る男。男Aと女Aの Pant タイムは、楽  
しいデート。暗転。キーボードのカチャカチャ音。

## 6 社会人の俺

明るくなる。布団に男女。

男は。パンツをはき、ピロートーク。わりとどれも大げさである。

女 今日ほうまくいったね。

男 ……。

女 興奮しちゃった？

男 はは。

女 いつも勃たないのに。  
男 毎回すいませんです。  
女 でも今日は満足。  
男 それはよかったです。  
女 自分でしちゃだめだよ。遅くなるっていうし。  
男 はあ。  
女 そんな暇ない？  
男 暇も体力もないですね。  
女 そんな仕事させてるつもりないけどな。  
男 俺使えない社員なんで。精一杯です。  
女 そうね。君はあんまり使えないね。仕事もあっちも。  
男 ははは。  
女 なんで君と寝てるんだろうね、私。  
男 なんでですか。  
女 君は何で？  
男 質問を質問で返さないくださいよ。  
女 うーん。

女、布団に包まる。

女 君が好きだから？  
男 まさか。はてなついてるし。  
女 だよねえ。なんでだろうねえ。  
男 さあ。

外で車の走る音。

女 旅行いきたいなあ。  
男 旅行ですか。  
女 寒いところがいい。新庄はさ、免許持ってる？  
男 もってますよ。  
女 私持ってないんだよね。東京だとなくてもなんとかなるし。  
男 俺実家長野なんで。

女 ないときついんだ。

男 免許取ったのは大学のサークルはいつてからなんですけどね。

女 サークル？

男 映画サークル入ってたんですよね。それで、機材運ぶのに免許ないと  
つらいんで。結局そのサークルはやめちゃったんですけど。

女 へー。新庄映画撮ってたんだ。もしかして、それここにある？

男 ないです。あっても見せないですけど。

女 えーなんでー？

男 恥ずかしいですから。

女 いいじゃん、本当はあるんでしょ。

男 ないですよ、全部捨てられました。俺が就職するって決めた日に。

女 え？

男 昔の彼女に。芸術肌だったから、あいつ。

女 ……そう。

また車の音。

女 ねえ。

男 はい？

女 寒い。

男 布団はいつてるじゃないですか。

女 あー寒いなー。寒い寒い。心が寒いー。

男 ……。

女 ほら。(手招き)

男、布団に入る。

女 ぎゅってして。

男 先輩ってそんな甘えん坊でしたっけ。

女 さーむーいーぎゅーってしてー！

後ろからぎゅっとする。

女 男 女  
あ。

女 ？  
わかつちやった。

男 はい？

女 君と寝る理由。

男 なんですか。

女 君の抱きしめ方。あいつに似てる。

男 へー。

女 あ、てきとーだね。

男 まあ。

女 昔の男の話をするな？

男 いや、さっき俺もしちやいましたから。

女 そうだよね、君に言える権利はないよね。

男 はい。

女 ねえ、頭撫でて。

男、頭を撫でる。ふと笑う。

女 頭何かついてる？

男 いえ、そういうわけじゃ。

女 じゃあなんで。

男 いや、これが普通だよなあって。

女 ーん？

よくわからないといった感じの女。素直に頭を撫でられている。

女 何かあった？

男 なんですか。

女 元気だからさ。なんでだろうって。

男 ……今日、幼馴染を見かけました。

女 あ、その子のが好きなんだ？

男 女 いえ、全然。なんか仲はよかったし、やっぱエロいこともあったりしましたけど。高校生だったんで、俺はサカってただけでした。でも、

女 たぶん向こうは俺のこと好きだったんだと思います。  
男 なんだよ。自慢？

女 自虐ですよ。その子、子供連れてましたから。  
男 ……。うわー。

女 なんかもそれみてたら楽しくなっちゃって。  
男 ふうん。

女 あー、こいつ今幸せなんだろうなーって。  
男 うん。

男 そう思うと笑いが止まらなくて、なんか、色々思い出しちゃったんで  
女 すよね、昔のこと。思い出せば思い出すほど、あいつ俺のこと好きだ  
男 ったんだろうなって。

女 君もてるんだね。

男 努力したんですよこれでも。

女 ふうん。それで？

男 向こうは気づかなかったみたいで、そのまま通り過ぎました。で、家  
女 に帰って、気づいたらなんかすごいことになって。最近自然になる  
男 なんてほとんどなかったのに。何でだろうって思うと、やっぱりあいつ  
女 なんですよ、原因。気づいたら、幸せそうないつを、ぐっっちゃぐち  
男 やにしてやりたいって。もうそればかり考えてました。

女 君、サイテーだね。

男 ですね。

女 だから今日元気なんだ

男 はい。

女 またその子とあつたらどうするの？

男 さあ、どうですかね。

女 教えてよ。

男 たぶん、何にもできないですよ。トラウマですから。先輩も同じなん  
女 じゃないですか？

女 ……。

車の音。

間。男女はよく見ると不自然に一時停止。キーボードを叩く音。

また動き始める。しばらくの間、ぎこちなさのある演技。コテコテ感

が増す。

ねえ。

はい。

かばんとつて。

はい。

男、かばんを取ってもどつてくる。女、かばんに手を入れてごそごそ。中から封筒を取り出す。決して体が布団から出ないように隠している。

はい。今日の分。

……。 (受け取る)

忘れちやうといけないからね。

加奈さん。俺の前では隠さなくていいですよ。

いや。

でもするときは散々見てるんだし。

するときはいいの。それに集中できるから。でも普通るときはいや。

そうですか。

ね、それより旅行どこに行こうか決めようよ。

仕事休めないじゃないですか。

やっぱり北海道かな。失樂園みたいな。

ちよつと。

新庄は行きたいところある？

休み取れないですよ。

私上司よ？任せなさい。

職権乱用。それに一緒に休んだら噂されますつて。

いいじゃん、別に。今さらだし。

先輩がよくても俺がよくないです。

あたしの悪評が移っちゃうから？

いや、そういうのでは。

ふうん。新庄もやっぱり体面とかは気にするんだね。

そんなことないです。

じゃあみんなにいつてみてよ。私と金もらつてやつてるって！

男 ……。

沈黙。

女 怒った？

男 いえ。でも、どうかしたんですか。

女 別に。あ、じゃあなんか買ってあげようか。旅行ついでに車でも買って  
ちやう？

男 そんな高い買い物。

女 買ってあげるよ。

男 いいですよ。

女 ねえ、買わせて。お願い。

男 だめです。

女 別に君を縛るつもりじゃないの。お金を使いたいだけなの。

男 そんなにもらってるんですか。

女 ……今日、口座を見たの。ありえないくらい入ってた。もういいって  
いつてるのに。あいつの金なんか、もっていたくない。

女、すすり泣き。

男 ……。

男、頭を撫でる。それに寄り添う女。男、女に情が移ってしまう。

男 傷、治しちやうってのはどうですか？皮膚移植とかで。

女 え？

男 整形外科ならお金いっぱい使えますよ。それに傷もなくなればほかの  
やつとも寝れます。普通に恋人だって作れるようになります。それに  
その人のことも忘れられて、一石三鳥くらいですよ。加奈さんみたい  
な人がずっとこんな状態よくないですよ。うん、本当にもったいない。  
どうです？

女 うん……。

男 俺知り合いに医者いるんで、そいつに聞いてみますよ。ちよつとまっ



てください。(携帯電話を開く)

女 まって。(携帯電話を閉じさせる)

男 どうしてですか。

女 傷は、消したくないの。

男 は？

女 これしかないの。わたし。これしかあの人とつながってるものがないの。

男 ……。

女 馬鹿だよ。うん、わかってる。わかってるんだけどね、まだ好きなの。やっぱり好きなの。私このぬるま湯の中にいたい。悲劇のヒロインでいたい…。

男 ……。

沈黙。

男、何かに気づいて疑問顔。

男 あれ。

女 どうかした？

男 えーっと。

女 何よ？

男 いや、すいません。流し見だったから。

女 もう。

男 えーと。昨日のドラマでは確か…。

カチャカチ音。

男女、パワーオフ。パワーオン。

女 ありがとう。新庄があんなに熱くなってたの初めてみた。いつも無感情みただったのに。熱くなることもあるんだね。

男 ……。

女 一緒に、旅行いこうよ。

男 ……。

女 また来週会おう。エッチしよう。お金持ってくるから。

男 ……。

女 信二さん。

男 俺は信二さんじゃありません。

女 知ってる。

男 ……。

女 ねえ。

男 加奈さん。

女 ん？

男 やっぱ、俺会社辞めます。

女 え？

男 あ、勘違いしないでくださいね。別に加奈さんのせいでやめるわけじ

やないですから。

女 じゃあ。

男 ていうか、理由とか自分でもよくわかんないんで聞かないでください。

女 なんかわかんないけど、もう無理っす。無理なんです。ほんと。ちよ

っと、どうしようもない。

女 どうしたの。

男 これも、今日で終わりです。申し訳ないんですけど。あの、

急に吐き気を覚えたのか、口を押さえてトイレに行く男。吐いている音。

勢いよく戻ってきて（外にいる脳内妖精に戻らされて）、女を押し倒す。暗転。ケータイの着信音。

## 7 走馬灯

男 B なぜこんなにも邪魔が入るのか！

男 C 何たる不幸！なんたる心外！

男 D 俺に悪意でもあるというのか？！

女 B でてあげればいいじゃない。

女 C そうよそうよ、かわいそうよ！

女 D 男女共同参画社会を望むー！

携帯電話の音が主張する。

男 B うるさいうるさい！

女 B いいえ黙りません黙りませんよ！

女 C 女の子からの電話無視するなんてひどい！

女 D こんな所でこもってないで出てあげればいいじゃない！

女 B どうせここでやにやしてただけのくせに。

女 C どうせここでむらむらしてるだけのくせに。

女 D どうせ頑張ったって勃たないくせに。

男 D 黙れ！

女 D この印籠が目に入らぬかー！（携帯電話を印籠がわりにして目に入れようとする）

男 D ぐわー！（目をやられた感じ）

女 C 寺山も言ってます、書を捨てよ街へ出よう！（文庫本を手にして）

女 B ヤングサンデーやジャンプよりよっぽど大事でしょ？（ヤングサンデーやジャンプを投げ捨てて）

男 B 俺は死にかけなんだ！死にかけなんだぞ！

男 C ちよつとぐらい夢をみたっていいじゃないか。昔を振り返ってもいいじゃないか。

男 D 俺は喉が渴いているだけなんだ。ピンクモラトリウムが欲しいだけなんだ。

女 D あるじゃない。ここに、ピンクモラトリウムが。（携帯電話を取りだす）

鳴り続ける携帯電話。一瞬詰まる男性陣。

女 C でればいいじゃない。それで解決よ。

女 B 付き合ってたんでしょ？きっと大丈夫。

男 B それは誤解である！

男 C 一度も付きあっているなんて言っていない！

男 D あいつが勝手に勘違いしてただけだ！

女 B ひっどーい！！

女C さいてー！

女D 男としてありえない！

ピーチクパーチク。

男B お前は俺のくせに生意気だぞ！

男C ピーチクパーチクするな！そんな所まで女のフリして！

男D ええい今日はもう寝る！就寝だ！瞼を閉じろ！

電気を消す。携帯電話の音が鳴り響く。  
再び電気がつく。

男B 眠れないじゃないか！

男C いつまでかけてくるつもりだ！

男D 電源を切れ！電源を切るんだ！

携帯電話を女Dから奪おうとする。させない女性陣。

女C デイツフェンス！デイツフェンス！

攻めあぐねる男性陣。女たちは女Aに携帯電話を渡す。

携帯電話の音が止まる。

ほっとする男性陣。

再びなり始める携帯電話。

女D もうさ、かっこいい自分に浸るのはやめようよ。

女C 毎回設定だけ変えて。妄想に浸るのもそろそろ飽きるでしょ。何回繰り返すの？

女B （部屋にあるマンガを手にとって）今回は小年誌のラブコメに、青年誌の同棲ものに。最後のは何？あ、昨日見たた不倫もののドラマでしょ。

女D あーゆーのカッコいいって思ってるの？ほとんど嘘じゃない。私やつてて疲れちゃった。

女C いつも同じオカズ使ってるから勃たないんだよきつと。

女 B ね、電話とつちやお。

男 B いやだ！

男 C いやだいやだ！

男 D いやだいやだいやだ！

女 A (男 A に向かって、まるで携帯から声が出てるよう) ねえ。

一斉に注目。

女 A なんて私のことは思い出してくれないの。

男 全 ……。

女 A なんて私をオカズにしなかったの。

男 B ……それは、きみが……。

女 A 私が？

男 C 君のことが、好きだった。

女 A 知ってるよ。

男 D だから、汚したくなかった。君の思い出だけは……。

女 A なにそれ。今度は何の影響？

男 全 ……。

女 A トレンディドラマ？少女マンガ？それとも何かの映画？

男 全 ……。

女 A ずるいよ。私も妄想に出演させてよ。ね？

カチャカチャ音。

女 A こら！

カチャカチャ音が止まる。

女 A、無言で高校の制服に着替える。

男たちは抵抗するが、今度は女たちが男を馬に見立てて走馬灯を作り上げる。

Mイン。パントマイム。ラブホテルの一室から始まる。ほかの部屋でセックスしている客。

お互い初めてで緊張している。ベッドに腰掛ける二人。

カラオケに気づく。気まずくてテレビをつける。AVチャンネル。すぐに消す。

シャワーを浴びることを提案。賛成。男がシャワーを浴びる。

出てくると女がベッドに横たわっている。

その態勢に色気を感じた男は、すぐに襲いかかろうとする。

それを女がとめる。服を脱ぐ女。

照明をうす暗くする。初めてなので恥ずかしかったようだ。

布団の中でもぞもぞ。女は顔だけ見えている。

いざ、という段。男は性急に下着を脱ぎ、挿入体制に移る。

が、男の男根が反応していない。男、必死に愛撫を繰り返して勃起しようとする。

だが反応しない。あせる男。

Mが止まる。

男 あれ、おかしいな。

女 疲れてるんだよ、きつと。

男 ごめん。

女 ううん、気にしてないよ。

女全 （口々に）気にしてないよ。

口々に「気にしてないよ」「精神的な問題だよ」「緊張してるのかな？」

「オナニーのしすぎじゃない？」「焦っちゃだめだよ」「ぎゅってしてただけでいいの」「疲れてるのかな」「ナイーブなんだね」

次第に辛辣に「私ってそんなに魅力ないかな」「私が下手だから、ごめんね」「もしかして、病気のの？」「薬使ってみようよ」「女だって性欲あるんだよ」「私のこと好きじゃないの？」「勃たないって、なにそれ」「女性に対して失礼」「他に好きな人がいるの？」「普通にドン引きです」「心弱すぎ」

私たちの不満はBGMのようになってくる。

女 B この相談室を開設して、一番意外だったことは、いざ挿入という時にペニスが萎えてしまうという相談がとでも多かったことです。

女 C これは遅漏でもなく射精しないので無漏症といってもいいかもしれませんが。ただ自慰ではすぐに射精できるのが特徴です。

女 D 私はそれに「男性不感症」という病名をつけました。いずれ一般的に認められる医学病名になるかもしれませんが。

## 9

## 妄想狂

舞台上にあった洗濯物の山が崩れる。中には男 S。ひたすらノートパソコンをカチャカチャしている。

男 S あ。

女たちは携帯電話を口元にあてながらしゃべる。

女 B もしもしー？ひさしぶりじゃーん。

女 C まだ番号変えてなかったんだー。元気ー？

女 D 私？私は今幸せだよー？

女 B 今二人目がおなかについてさー。

女 C え、知らなかったの？結構前に結婚したよ。

女 D あーたっくん同窓会こないもんねー。

女 B え？…まだそんなことおぼえてたんだー。

女 C そっかー。あの後すぐ別れたもんねー。

女 D てか何年前の話よ。気にしすぎ。あつははー。

男 S ああああああ！！

布団に閉じこもる男 S。

女 A ここは君のコスモだから。全部君が生み出したものだけど。妄想が止まらないね。自虐は楽しいもんね。でも妄想でもエッチできないなん

て、みじめだね。あ、また自分で自分をいじめちゃった。まあいいか。それも楽しいしね。

男 S そうだよ、それが悪いか！

女 A いいよ、じゃあ。ここにしようよ。電話なんかとらなくていいって。いつかはピンクモラトリアムが降ってくるよ。それを信じて、このまま寝ちゃおう。もしかしたら明日かもしれない。一年後かもしれない。死ぬ直前かもしれないけどね。

男 S 寝るぞー！俺は寝るぞー！

女 B お休み、新庄君。

女 C お休み、達也。

女 D お休み、新庄。

女 A お休み、たつくん。

男 S お休み俺！このまま寝ちゃうぞー。熟睡だー。きつと起きたころには俺は死んでる！死にかけてるからなー。いざという時にちんこ勃たなくて沙織に変な噂たてられたなんて妄想だー。就職して映画を捨てた俺に優子が愛想をつかせたのは妄想だー。先輩がいまだに旦那と幸せにしているなんて妄想だー。だってここはコスモなんだから。全部妄想なんだー。お休みー。お休みー。

携帯電話が鳴る。しかし、全員見向きもしない。

男 B、C、D、悲しそうに自分の股間をさする。そのまま睡眠に移る。

女たちも寝る。

だが、一人だけ起きている人間がいる。男 A である。起きているのは体だけではない。股間の一物も、起きている。なにやら熱い BGM。

男 A おい。どういうことだよ。

男 S ？

男 A 忘れちゃったのかよ。隅田川の土手で必死に探したエロ本を。

男 S ！

男 A 目が悪いから水泳の授業ですっげー後悔したよな。だから俺はコンタクトするようになったんだ。

男 S ……。

男 A パソコンの能力が低いから、一枚のエロ画像落とすのにすげー時間が



かかった。だから落としたらプリントアウトして大切なオカズにし  
た！

男B あるある。

男C あのころは光なんてなかったしな。

男D クリックしたらグロ画像でもあった。

男A 俺、頑張ってたよ。だってセックスしたかったから。髪型だってキメ  
てさ、女の子に好かれるような話もして。対して好きじゃなかったよ、  
確かに。だからすぐに振った。あいつの友達に散々けなされた。でも  
俺は後悔なんてしてない。必死に努力したから。女とやるために。必  
死だったろ。なあ。忘れちゃったのか？俺はあの情熱を忘れちゃった  
のか？！違うだろ。セックスしたくて、めっちゃ努力しただろ！

男B、C、Dに元気が湧いてくる。

男A 俺、あいつは好きじゃない。でもあいつの身体、すげーきれいだった！  
見ようよ、もう一回。押し倒して、服引っぺがして、抵抗したらぶっ  
叩いてやって、あいつの身体目に焼き付けて。ぶち込んでやるんだ！  
だってそうだろ！俺はオスなんだ！食欲と睡眠欲よりも、なによりも  
性欲が一番強いんだ！

男B 俺はオスだ！

男C 俺はオスだ！

男D 俺はオスだ！

男全 渴きをいやせるのは、ピンクモラトリアムだけ！

携帯電話の音だけが鳴り響く。

男S、携帯電話を手取る。パソコンをシャツトダウン。同時に脳内  
妖精たちは舞台上から降りる。妄想は終わったのだ。

電話を取る男S。Mイン。「あの素晴らしい愛をもう一度」

男S もしもし。あかねちゃん？

女A (録音)もしもし、たちちゃん？久しぶりー。つながるのに全然でな  
いから心配したよ。電話番号変わってなくてよかった。

男S あ、うん。ごめん。どうしたの。

女A ねえねえ、気づいてた？

男S え？

女A この前さ、すれ違ったよね。

男S あ。

女A あ、やっぱり気づいてたんだ。ひどいよー。声かけてくれればいいのに。

男S いや、なんかびっくりしちゃって。

次第に音が大きくなってくる。脳内妖精たちはピンクモラトリウムを待ち望む。

男、電話をしながら気付く。股間を見る。勃起している。同時に、天井からピンクモラトリウムが降ってくる。沸き立つ脳内妖精たち。

男は会話をつづけながら、ズボンを脱ぎ、パンツを脱ぎ、己の男根をこすり始める。ピンクモラトリウムはどんどん降ってくる。それを全身に浴び、脳内妖精たちは狂喜乱舞する。

男のマネをする脳内妖精もいる。男はそれをみて、己のみじめな様を自覚して、涙する。しかし手は止めない。

声がぶれる。女に心配されるも、風邪だといってごまかす。舞台はだんだん暗くなり、音楽はだんだん大きくなる。完全に暗転。

急に明るくなる。音も切れる。男が一人で布団の中にいる。なにやらぼそぼそと笑っている。右手でキーボードをカチャカチャと、左手で自慰をしている。

男S (女Aの口真似) ねえ、今度会わない？ (男Sの声) そうだね。こんな近所だとは思わなかったし。(女A) ね。明日旦那帰ってくるの遅いんだ。だから飲みにも行こうよ。(男S) 子供はどうするの？ (女A) 親に預けるから大丈夫。あ、私いいバー知ってるんだー、

Mカットイン。照明、フェードアウト。

幕。